

地域子育て支援拠点における父親を対象とした子育て支援プログラムの実践と課題 —— 関西学院子どもセンターにおける実践から見えてきたもの ——

Implementation and Challenges of the Support Program for Fathers at a Regional Childcare Support Center
—— From the Implementation at Kwansei Gakuin Child Center ——

小 山 顕*

Abstract

This paper introduced the implementation of the support program for fathers at the regional childcare support division (called Sapo-Sapo) of Kwansei Gakuin Child Center. The program called “Papa Talk Program Nishinomiya (PTP)” was originally developed in collaboration with Sapo-Sapo and city of Nishinomiya in 2010. Since then the program has been continuously and gradually expanded. In this paper, the writer described the progress of the program development, the purposes and key concepts, and some examples of actual activity of the program. The following is the proposal of this study. The support program that places value on providing receptive environment and encouraging development of fathers’ own autonomy can be effective for fathers to participate in child rearing with more interest and positive attitude.

キーワード：子育て支援、父親、地域子育て支援拠点、パパトーク

1. 本稿の背景と目的

昨今、父親の子育てへの積極的な参加の重要性が多く語られ、父親の子育てへの参加が広がりを見せる一方で、全体を見る時、子育て支援センターや子育て支援のひろばを恒常的に利用する父親はまだ少数派と言え、地域子ども・子育て支援拠点といった地域の親子への支援の場が、父親にとっても、より身近な存在となっていくことが求められている。本稿では、筆者が運営委員、部会委員を務める関西学院大学西宮聖和キャンパスに所在する関西学院子どもセンター内の地域子ども・子育て支援事業部会（通称に基づき、以下さぼさぼという）において約10年間にわたって実施されてきた、父親を対象とした子育て支援プログラム（以下、「パパトークプログラムにしのみや」という）の実践を紹介するとともに、その継続の実践から得た知見と、取り組みを通して見えてきた課題について取り上げ考察し、今後の父親を対象とした子育て支援の在り方についての展望と提言を試みることを目的とする。

2. プログラム開発の経緯

「パパトークプログラムにしのみや」の具体的な内容について取り上げる前に、ここではまず当該プログラムの開発の経緯について述べることにする。

「パパトークプログラムにしのみや」のオリジナルプログラム開発は2009年に遡ることができる。西宮市では2009年に、市の職員である子育て中の父親たち有志が中心となり、『父子手帳』が企画作成された。この取り組みは、当時としては全国的に見ても先駆的なものであり、好評を得ることとなった。

その関心の高さから、父親の情報交換の場や父親の子育てを支えるプログラムの必要性が把握されたことから、西宮市と関西学院子どもセンターが共同し、父親から発信され広がるコミュニティの創生を主たる目的とする父親を対象とした子育て支援プログラムである「パパトークプログラム」の開発が着手された。

プログラム開発は、芝野の修正版デザイン・アンド・ディベロップメント (M-D&D)¹⁾ の手法に基

* Ken OYAMA 聖和短期大学 子ども家庭支援の心理学

1) M-D&D (Modified Design and Development) とは、芝野が、Edwin J. Thomas が提唱したソーシャルワーク実践モデルの開発手続きである DR&U (Developmental Research and Utilization) 改良を加えた開発手続きである。

づき、開発手続きの第1段階（問題の把握と分析）として、西宮市在住の子育て中の父親の子育てにおけるニーズと、母親の父親への子育てにおけるニーズを把握する目的で、父親（2009年10月14日：4名）、母親（2009年10月16日：6名）それぞれにグループインタビューを実施し、分析が行われた。また、子育て支援情報等のニーズ把握を目的に父子手帳に関するアンケートを、地域の児童館職員を通じて来館した父親に直接依頼し、加えて児童館利用者である母親を通じて自宅で父親に記入依頼する形式で実施し（2009年11～12月）、93名の回答者を得て、結果が整理された。

第2段階（プログラムのたたき台のデザイン）として、上記と同じ手法で開発された既存プログラム（主に母親を対象にした子育て支援講座「親と子のふれあい講座」プログラム²⁾の理念、構造、内容の枠組みを基盤として、第1段階で抽出されたニーズを反映したプログラムをたたき台としてデザインした。

第3段階（試行と改良）として、実際にプログラムが地域の児童館2館において試行された。参加者は、第1回目（2010年1月23日）が4名、第2回目（2010年1月30日）は7名であった。参加者にはプログラム終了時に評価のためのアンケート記入を依頼され、さらにプログラム終了直後に、開催場所となった児童館の職員と振り返りが行われ、運営上の改善点が抽出された。また本プログラムが西宮市との共同開発プログラムであること、配布された父子

手帳自体の評価も含め今後の地域連携を見越して、父子手帳編集委員1名ずつにプログラム参加者としてモニター依頼をし、第1回目と第2回目終了後それぞれに、プログラム作成者とともにプログラム評価を目的としたディブリーフィングが実施された。

これらの試行プロセスとその結果から得られたデータの分析を経た後、さらなるプログラム内容のブラッシュアップがなされ、正式に関西学院子どもセンターのさぼさぼを会場としたプログラムが2010年よりスタートした。そして、翌2011年からは3回連続のプログラムに拡大して実践され、現在（2020年2月時点）で9期目に至っている。その間、地域に根ざしたプログラムであることを強調する意味から、当初のプログラム名に「にしのみや」という地域名を加えた「パパトークプログラムにしのみや」に改名された。さらに、2017年11月からは、市内の子育て支援実践の中心拠点である西宮市立子育て総合センターのびのびあおぞら館（以下、あおぞら館という³⁾）を第2のプログラムの実施拠点とし、現在3期目（3年目）に至っている。

3. 「パパトークプログラムにしのみや」の目的

本章では、「パパトークプログラムにしのみや」（以下、パパトークという）の目的、続く第4章においてはそのキーコンセプト、第5章ではプログラムの内容について取り上げることにより、それらを総合してパパトークのおおよそのあらましについて



図1：西宮市 父子手帳「Hello Baby!! みやっこの育て方 ～お父さんになるあなたへ～」の配布

<https://www.nishi.or.jp/kosodate/ninshin/ninshingawakattara/hajimeni/fushitetyo.html> 2020年2月1日閲覧

- 2) 神戸母子交流研究会（現：特定非営利活動法人親と子のふれあい研究会）によって開発され、主に神戸市内の児童館等において広く提供されている子育てプログラム。
- 3) 西宮市における子育て支援の全般を担う中核施設であり、行政・家庭・地域社会などと連携した多様な支援が実施されている。

述べることにする。

パパトークの目的（目指すゴール）は4つのポイントに集約することができる。以下において、それぞれのポイントについて見ていくことにする。

1) 子育て中の父親が集い、自身の日頃の子育てをふりかえる

情報化とスピード化が加速する現代社会での日々を過ごす中において「ふりかえる」という作業は容易なことではないのかもしれない。その理由の一つとしては、とどまることを知らぬかのように次から次へと押し寄せる情報の波や日々のなすべき事柄の前に立つ時、今、あえてその場所にとどまって物事、ひいては自分自身をふりかえるという試みは世の中の流れと逆行するものであり、非効率的であると思われるがちだからではないだろうか。

ましてやその状況の中で、子育て中の父親が自らの日頃の子育てをふりかえることは必ずしも容易なことではないと思われる。しかしパパトークでは、あえて父親たちが集う中で、自身の日頃の子育てを多少なりとも客観的にふりかえるという作業を促している。具体的にはグループワークを活用してのふりかえりを大切にしている。自らの日々の子育てを自分一人でふりかえることも意義がないわけではないが、父親同士で互いに自身の子育てを顧み、それを分かち合う（シェアする）ことで、自分の子育てをより客観的に見つめることが可能になるからである。

ふりかえりは「成長への鍵」、「未来の自分へのアドバイス」と言い換えることができるであろう。パパトークでは、共に行うふりかえりを通して、それぞれの父親がそれぞれの在り方で成長し、自発的な子育てへのかかわりをサポートすることを一つの目的として据えている。

2) 父親同士の子育てに関する意見交換や情報共有、思いの表出の場となる

パパトークの実践を通して見えてきた事柄の一つは、父親は子育てについて話をしたい、子育てに関する情報を得たい、共有したい、自らの子育てについての思いを言葉にして表出したいという高いニーズを持っているということである。ここでは紙幅の関係上、詳細を述べることはしないが、毎回のプログラム後に実施するアンケートには、「日頃話せな

かった子育てについて今日は話すことが出来て良かった」や「他者の子育ての話を知ることが出来て同じような思いを持っていることが分かったことが良かった」、「子育てに関する（多いのが遊び場や遊び方についての）情報を得ることができて役に立った」、また「自分が子育てをしている中で考えていることや思っていることを話せ、聞いてもらえたことが良かった」という感想が頻繁に記されている。

要するに父親も子育てについて話したい、聞いてもらいたいのである。しかし普段の生活環境（職場や家庭）の中では、なかなかそのニーズが満たされにくい父親たちもいるということが明らかになってきたといえよう。無論、職場においても、ましてや家庭においても、同僚やパートナーとの間で、子育てについての考えや思いの共有ができる環境と関係が備えられていることが望ましいと考えることができるが、様々な事由でそれが叶わない中にある父親たちも存在する。

パパトークの一つの目的は、どの父親にも安全でホッとできる環境を保障し、父親にとって、子育てに関する意見交換や情報共有、思いの表出の場という一つの重要な社会資源となることにある。

3) 父親が主体となつての子育てをトーク（ダイアログ）の中から見出す

この目的については前述の①②と重複する点もあるが、パパトークという名の通り、プログラムの中で最も重きを置いているグループでの父親同士のトーク（ダイアログ＝対話・会話）を介して、新たな、そして多様な価値観と出会い、また自らの子育てを客観視することで俯瞰的にとらえ、自分なりの子育ての在り方を柔軟性を持って主体的に見出していくプロセスを一時かもしれないが共に歩みながら支える、少なくともその糸口となる。そのことをプログラムの重要な目的の一つとしている。

4) 父親同士のグループが基盤となったコミュニティ（つながり）を創生する

現代社会の状況、子育て家庭を取り巻く状況を語る時に、地域における人と人とのつながりの希薄化という問題を無視することはできない。そこに少子高齢化、核家族化、都市化、情報化などの要因に加え、子育て・子育てをゆったりと見守ろうとする包容的な社会の在り方よりも、気忙しいともいえる社

会風潮などが複雑に折り重なり、今の子育ては個人にかかる比重が非常に大きくなっていると考えられる。つまり現代の子育ては、個による育ての営みと化した“個育て”と言っても過言ではないであろう。

そのような社会の中では、母親だけでなく、孤立した父親がいかに多いことであろうか。前述のように、自らの子育てについて語りたい、語り合いたいというニーズを持っている父親も多い。しかし一旦社会人となり世の中に出ると、当然の要素があるにせよ、一般的にそこでの人々とのかかわりは仕事に軸を置いたものが主となりやすく、その関係性の中では互いの子育てや家庭に関するプライベートにかかわる事柄について語り合ったり、そのことによって自らをふりかえったりすることは環境的に（そこに流れている空気感からか？）困難である。そこに満たされない思いや辛さを覚え、孤立している父親がいることを我々の社会が認識する必要があるのではなかろうか。

そのような状況の中にあって大切にしている目的は、プログラムへの参加を通して知り合った父親グループが基盤となり、父親発信のコミュニティの創生に取り組み、その発展に努めることにある。

パパであるという唯一の共通点のみで出会った、ある意味自分とは“異なる世界”で生きている存在、異なる職種に就き、異なる情報や価値観を持っている存在と出会い、そこで緩やかにつながりあうことで生まれてくる多様性という豊かさを有した父親たちによるコミュニティの創生とその発展がいかに意義深いものであるか、またそれが父親だけに閉じられたコミュニティではなく、父親から発信され、家族を、また地域をも巻き込んだコミュニティを生み出していく大きな可能性を持ったものであるか、パパトークの10年にわたる歩みと人々のつながりがそのことをはっきりと教えてくれている。この点については後ほど詳しく触れることにしたい。

4. キーコンセプト

次にパパトークの7つのキーコンセプト（プログラム全体を貫く基盤的な考え方）を紹介し、解説をする。

1) Welcoming を大切にする

パパトークのキーコンセプトの一つに運営スタッフ（以下、サポーターという）によるプログラム参加者に対する Welcoming がある。これは如何なる対人援助活動においても必須とされる援助者⁴⁾が持ち合わせておくべき基礎的態度であり、具体的には参加者一人ひとりを温かく、話しやすい雰囲気迎え入れることである。そのためにはサポーターの洗練された言語的、非言語的コミュニケーションスキルや配慮ある環境設定などが求められる。

2) Connecting を大切にする

Connecting はパパトークの実践において非常に重要視される事柄である。誰が誰、何と Connect（つなぐ・つながる）のかということだが、Connect には、

- i) サポーター（グループワーカー）と参加者（グループメンバー）
- ii) グループメンバー同士
- iii) グループメンバーとそれぞれの地域コミュニティ

がつながるという3つの意味がある。

パパトークが十分にその機能を果たし、グループ本来の目的を達成するためには、サポーターが参加者一人ひとりを受け止め、まず自分自身と参加者との間につながりを築いていくことが不可欠である。加えてサポーターは、プログラムへの参加者同士の中でつながりが生まれそれが拡がりをもっていくよう意図的に働きかけていく必要がある。さらに、グループメンバーがプログラムを終えた後でも、それぞれの地域コミュニティとつながり、人と人とを、資源とをつなぐ「結節点」となっていけるように Empower し、Encourage していくことが重要である。

3) グループへの参加とグループメンバーの相互作用を大切にする

パパトークはメンバーの参加があって初めて成立するのであって、メンバーの自発性や自主性を基盤とした主体的なプログラムへの参加を大切にしてい

4) 「パパトークプログラムにのみや」では、可能な限りプログラム参加者と運営スタッフであるサポーターとの間にはたらくパワーバランスに配慮し、プログラムの性質上、被援助者と援助者という関係の構図ではなく、よりフラットな関係のあり方を意識的に大切にしている。事実、全てのサポーターが過去のプログラムへの参加者から構成されていることも特筆すべき点であろう。本文中では、記述内容を説明する便宜上、あえて援助者という表現を用いた。

る。サポーターは毎回のプログラムの冒頭でプログラムのいくつかのルール（緩やかな枠組み）を説明することになっている。その中には、グループ活動としてのトークへの積極的な参加、当該プログラムは他者の発言を否定したり、意見を戦わせたりする場ではないこと、メンバーの誰もが安心して本音で自らのことをトークできる安全な場を相互の協力によって形成していきえるようにかくメンバーの話を書く姿勢を大切にすること、そして秘密の保持を大切にすることを明確にし、メンバー間の共通認識となるように働きかけている。

また、あるメンバーが子育てに関する葛藤・困りごとがある時や、質問や他のメンバーの考えを聞いてみたいという時にはサポーターが問題解決を図るようなことをするのではなく、同じような境遇にあったり、似た経験をしたメンバー同士、異なる価値観を持つメンバーとの多様性を有したかかわり合い、相互作用などのグループ体験（経験）を通して、メンバーが自らの子育てやパートナーとの関係性のあり方をふりかえったり、捉えなおす機会の提供を目指している。

このように、主としてトークをするというプログラム活動を通して、メンバーが相互に助け合ったり、多様な考え方に触れながら、時に一緒に笑いあい、時に考え共感しあうプロセスを経て、それぞれに達成感や充実感を得ながら課題に向き合い成長していくこと目指している。

4) “イクメン” 養成の場ではない

パパトークは世にいう“イクメン”を養成し輩出する場ではない。厚生労働省の公式ホームページ⁵⁾には、「イクメンとは、子育てを楽しみ、自分自身も成長する男性のこと。」と定義されている。イクメンという言葉が生まれた時期は折しもパパトークがスタートした時期と重なり、それは2010年6月に当時の厚生労働省によって唱えられた「イクメンプロジェクト」に端を発する。その後どのような経緯を経てイクメンという言葉が社会的に認知され、何を社会に提供していったのかについてはここで語るべき事柄の範疇ではないことから扱うことはしないが、問題となるのは、イクメンという言葉が市民権を得れば得るほど、当の父親にとって生き難さ、し

んどさを感じる要因となっていく側面もあるということである（このことについてはぜひ別の機会により詳しく触れることにしたい）。多様なメディア媒体などを通して発信され、社会によって作り上げられてきた“理想の良き父親”像＝“イクメン”像は、副産物として父親たちを追い詰める要素を有していることは忘れてはならないことであろう。

現在日本では多種多様な父親支援、父親を対象とした子育て支援に関するプログラムが実施されているが、パパトークでは参加者である父親に対してどのような父親であるべきかといった“あるべき父親像”といったこと、ましてや“イクメン”になることは一切提示したり求めたりしてはいない。なぜならそれは、他者から提示されたり、強要されたりすることではなく、父親自らが様々な情報や価値観に触れながらも、自発的、自主的に主体性をもって自らのあり方を決定していく、「自己決定」を促し尊重するという姿勢に価値を置いているからである。

5) 参加者の「してみたい！」を大切に

これは先ほどの「自己決定」に通ずることでもあるが、パパトークではプログラム参加者であるメンバーのニーズに基づいた要望である「こんなことをしてみたい！」や「こんなことをプログラム内容に取り入れてほしい！」という声を大切にしている。

具体的には、毎回プログラムの終了時にアンケートを実施し、その中で「次回プログラムに向けての希望、プログラムへの期待」という項目を作り、自由に記載してもらい、参加者のプログラムに対するニーズ把握を行っている。具体例をあげると、ある年から子育てに関するトピックを取り上げてミニ講座として提供することを始めるようになり、現在もそれは継続されている。そのきっかけとなったのは、アンケートに寄せられた「さぼさぼという大学に属する機関におけるプログラムであるので、その強みを生かして子育てに関するレクチャーがあってもよいと思う」という参加者のニーズによるものであった。

次章の「プログラム内容」の中でも触れるが、パパトークのプログラムはこの10年間を通して変化を遂げてきた。本稿の筆者はこれをプログラム自体の成長・発展であるにとらえている。無論、参加メン

5) 厚生労働省 HP 育MEN プロジェクト <https://ikumen-project.mhlw.go.jp/project/about/>

バーから寄せられる要望の精査は必要であるが、彼らが自由に自らの声をあげることができ、またそれが実現化されるといった開かれたプログラムとしての性格を有していることは、参加者の自主性、自発性に基づいた主体的参加意欲を高め、プログラムに対する愛着感を高めることにつながると考えることができる。

6) 父親から発信され拡がりのあるコミュニティ (多様なつながり) を創生する

本コンセプトは、前述のパパトークの目的の一つでもある「父親同士のグループが基盤となったコミュニティ (つながり) を創生する」に由来する。パパトークでは3回の連続プログラムを介して出会ったグループメンバーとの同期のつながりや、これまでの9期のメンバー同士をつなぐことをねらいとしたプログラムが工夫を凝らして実施されてきた。それらによってプログラムへのそれぞれの参加の時期を超えた拡がりをもったつながりである父親コミュニティの形成に至っている。

さらには、このコミュニティは父親同士のつながりに留まることなく、父親をその発信源として、子ども同士、またパートナーや祖父母、地域社会をも巻き込んだコミュニティとして成長と発展を遂げている。その詳細については、第4章の「プログラムの拡がり・多様性に向けて」において述べることにする。

7) スパイラルアップを大切にす

パパトークにおけるスパイラルアップには大別して2つの意味があるといえる。その1つ目は、先の5)の中でも述べたプログラム自体の継続的な改善・改良の取り組みである。プログラム自体の核となる目的にしっかりと軸を置きつつも、目的達成のための手段、道筋についてはその時々においてプログラムへの参加当事者たちの意思を尊重しつつ、工夫を凝らして継続的なプログラムの改善・改良によるスパイラルアップが図られてきた。この姿勢と取り組みは、プログラムの今後の発展において不可欠な要素である。

2つ目の意味は、運営スタッフであるサポーターのスパイラルアップである。連続プログラムとして実施されるようになった2011年当初は、本稿の筆者を含むプログラムの立ち上げにかかわってきた複数

のコアスタッフ (当時の呼称) によってプログラムのファシリテーションが担われ、プログラムの準備計画、当日の進行、ふりかえりを通しての評価、改善への取り組みといったいわゆる PDCA サイクルが実施されてきた。

しかし、限られ固定された一部の人員による運営では真のプログラムの発展と拡がりを進めていくことにはならないという考えに至り、サポーターの養成に本格的に取り組むこととなった。そしてその取り組みを成し遂げるためのキーパーソンたちとして注目したのがプログラムに参加者として参加した当事者たちであった。初めは一参加者ということで多少なりとも受動的な形で参加していた者に、今度はプログラムのファシリテーターとして参加してもらうことによって、より能動的なかわりを引き出し、プログラムの発展のためにそれぞれが有しているストレングスを発揮してもらうことをねらいとしたアプローチといえる。

幸いにもこのアプローチに対するポジティブな応答が多くあり、今ではプログラム運営の多くの部分が元参加者たち有志によって担われており、彼らによる PDCA の取り組みにより、サポーターとプログラムの質という両輪のスパイラルアップが図られている。

5. プログラム内容

本章ではパパトークの実施形態と現行モデルプログラム (3回連続プログラム) を紹介することにする。

パパトークはワンクール3回の連続プログラムであり、年に1度のペースで実施されている。実施時期についてはパイロットトライアルを重ねた結果、現在は7月、9月、11月各月に1回ずつ (計3回)、土曜日の13時30分~15時30分の2時間プログラムとなっており、グループワークを主としたプログラムの性質上、事前登録制とし、定員は基本的に (若干名の超過が発生した場合でも受け入れる柔軟性を持ちつつ) 12名で実施している。そこにスタッフであるサポーターが毎回3~4名加わることになる。さぼさぼでの開催の場合、会場の環境はさぼさぼ内のひろばの一部を天井から吊り下げられている可動式のパーテーションで仕切り、プログラム内で交わされるトーク内容の守秘に配慮し、機密性が保たれるように心掛けている。

表1：「パパトークプログラムにしのみや」基本プログラム

「パパトークプログラムにしのみや」		
4つの目的（メインテーマ）		
<ul style="list-style-type: none"> ・子育て中の父親が集い、自身の日頃の子育てをふりかえる ・親同士の子育てに関する意見交換や情報共有、思いの表出の場となる ・父親が主体となつての子育てをトーク（ダイアログ）の中から見出す ・父親同士のグループが基盤となったコミュニティ（つながり）を創生する 		
各回のテーマ（サブテーマ）		
第1回	第2回	第3回
<ul style="list-style-type: none"> ・プログラムを理解する（成り立ち・重点など） ・父親として、子どもとの関係をみつめる 	<ul style="list-style-type: none"> ・互いに対する理解を深める ・夫として、パートナーとの関係性をみつめる 	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニティの一員である意義を知る ・一人の存在（個）としての自分をもつめる
プログラム内容		
① Welcoming ②プログラム趣旨説明 ③基本ルールの説明 ④自己紹介 （参加者・サポーター） ⑤プログラムの流れの説明 （今日の流れ） ⑥第1セッション：西宮市『父子手帳』の紹介 ⑦第2セッション：本音トーク・おたずねトーク（グループに分かれてのトーク） ⑧トーク内容の全体でのシェアリング ⑨今日の感想 ⑩アンケートの実施 ⑪送り出し	① Welcoming ②プログラムの流れの説明 （今日の流れ） ③プログラムの趣旨の説明・確認 ④前回のふりかえり ⑤基本ルールの確認 ⑥近況報告 （参加者の自己紹介を兼ねて） ⑦アイスブレイク （お互いを知ろう！） ⑧トークセッション（グループに分かれてのトーク） ⑨全体でのシェアリング ⑩今日の感想 ⑪アンケートの実施 ⑫送り出し	① Welcoming ②プログラムの流れの説明 （今日の流れ） ③プログラムの趣旨の説明・確認 ④前回のふりかえり ⑤基本ルールの確認 ⑥近況報告 （前回からの間の出来事など） ⑦アイスブレイク ⑧トークセッション（グループ分けはせずに全体で：自分の夢を語ろう！） ⑨3回のプログラムをふりかえっての感想 ⑩アンケートの実施 ⑪送り出し

前述のように、開発当初に比べるとプログラム自体が発展し様々な改良が加えられてきた。本稿の第3章で紹介したようにパパトークには4つの目的（メインテーマ）があり、全3回のプログラムはそれらの目的を達成するために実施されるが、全3回の各回にもそれぞれに特化したサブテーマが設定されている。各回のサブテーマは、プログラム開始当初からほんやりとは存在していたが明確なものではなかった。しかし、9年という時の中で回を重ねプログラムが成熟し発展していくプロセスを通してその必要性が明確化されてきたものである。表1にメインテーマ、サブテーマを含む、基本モデルプログラムの概要を紹介する。

6. プログラムの拡がり（多様な活動の実例）

1) パパトークの普及化

西宮市と関西学院子どもセンターのさぼさぼとの共同によって開発されたパパトークはその開発以来、現在に至るまでの間に順調に発展を遂げてき

た。その一つの実が、2017年より開始された西宮市立子育て総合センターのびのびあおぞら館（以下、あおぞら館という）におけるプログラムの実施である。

パパトークにおいて、プログラムの継続性という重要な課題はクリアされてきたが、一方でプログラムの普及性は残存する課題の一つでもあった。この課題解決への取り組みとして2017年よりあおぞら館でのパパトークが開始され2020年2月までにその3期目を実施されてきた。さぼさぼとは異なる別の拠点、地域におけるパパトークの実施というプログラムの普及は、当該プログラムにかかわる者たちにとっての長年の願いであった。

あおぞら館におけるパパトーク開始のための準備とその実施は、当初それにかかわったサポーターたちにとって大きなチャレンジでもあった。その理由の一つは、さぼさぼと新たな実施拠点となるあおぞら館との間にある「異なる地域性」という要因であった。さぼさぼでの7年間の実施実績はあったものの、異なる地域性を持つ場所とそこに集う人々に

対してこれまで通りのプログラムの内容がフィットするのか？その地域によりフィットするようプログラム内容を修正すべきではないか？という意見が呈され、協議をした結果、パイロットトライアルとして本稿の筆者による「パパトーク」トライアル版の実施を正式なパパトークを前にあおぞら館にて行った。トライアル版のプログラム内容は単発（1回）の2時間とし、それまでさぼさぼにおいて行ってきたパパトークの内容を参考に、①父子手帳の紹介とその内容に基づいた父親同士のトーク、②子育てに関するミニ講義、③子育てに関する父親同士のフリートークの3つのパートで構成された内容で実施した。

実施結果（参加者を対象としたアンケート調査の結果の分析、サポーターとしてプログラムを進行した本稿筆者が受けた感触）から明らかになったことを総じていうならば、地域は異なれども、父親たちのプログラムへの評価と連続プログラム化への関心度は高く、パパトークが提供するプログラム内容の普遍的要素を確認することができた。この結果がプログラム内容をあえて修正することなく、新たな場における普及の扉を開く大きな後押しとなったといえる。

2) 多様な活動の実例

パパトークではその目的にあるように、父親同士のグループが基盤となったコミュニティ（つながり）の創生を重要視している。しかしその目的を具現化するためには様々な工夫と Creativity に富んだアイデア、そして実行力が必要である。幸いにもパパトークでは、これまでプログラムへの参加者の多くからこの目的への賛同を得ることができており、その達成とさらなる発展のための多様なアイデアが参加者である（あった）父親たちから出され今日までその歩みを進めることができています。

これまでにさぼさぼにおいては1期～9期（2011年～2019年）が、あおぞら館では1期～3期（2017年～2019年）が実施されてきた。参加者はそれぞれが申し込んだ「期」のプログラムに参加することで、当然ではあるが回が進むごとに同期のメンバー間での凝集性は高くなり、そこでつながりは生じやすくなる。しかし真に重要な点は、前述の目的である

コミュニティ（つながり）を創生するために、「期」を超えたより広いつながりをつくるための取り組みや工夫をどのように凝らすか、そして「期」を超えたつながりが生まれたならば、それをいかにして持続可能なものとしていくかということにある。そのために非常に有効な媒体として用いられてきたのが、期と期をつなぐパパトークのOBたちが一同に集う懇親会である。

実際のところコミュニティの創生のための斬新なアイデアやパパトークにおける新たな取り組みの多くが懇親会というアンオフィシャルな場での語り合いの中から生み出されていることは実に興味深いことである。自身の参加した「期」に制限されずに「期」を超えた多様性と拡がりに満ちたつながりの中で生まれる化学反応がまた次の多様な活動を生み出す大きな原動力となっていることを見るとき、アンオフィシャルで緩やかなつながりも実は意義深い活動であることを再認識させられる。

表2に、パパトークから派生し発展を遂げている父親たちが主体となって展開されている多種多様な活動の例を羅列する。

7. 課題と提言

パパトークの今後を展望するとき、プログラムの普及性が課題としてあげられる。この課題に対する取り組みについては前章においても触れたところではあるが、普及性については本プログラムの開発当初からその必要が語られていた事柄でもあり、今後、より積極的に取り組むべきポイントである。本プログラムは西宮市と関西学院子どもセンターとの共同開発プログラムであるというスタートラインに再度立ち返り、行政との連携をより密にし、子育て世代が集う児童館などの活用も含め、市内におけるプログラムのさらなる普及に取り組んでいく必要がある。そのためには、パパトークの意義、独自性、そしてその有用性に関する実証的検証研究の実施も取り組むべき課題の一つである⁶⁾。そこから得たデータ（エビデンス）を用いた説得力あるアピールを通して、行政の中での本プログラムへの認識を高めていくことがより高次の「共同」を生み出すために重要であると考えられる。

その他の課題として、プログラム内容の継続的ブ

6) 現在、「パパトークプログラムにしのみや」の有用性に関するグラウンデッド・セオリーを用いたプログラム参加者へのインタビュー分析を中心とした質的実証的研究の実施準備を進めている。

表2：「パパトークプログラムにしのみや」から派生した多様な活動の実例

パパさんぼ	週末に複数の父親たちが一緒になって子どもたちを連れて遊び場に繰り出し、共に時間を過ごす自発的なグループ活動
カメラ講座	カメラ好きな父親、母親が集うグループ活動
パパキャンプ	複数の父親たちと子どもたちで野外キャンプを行うグループ
ファミリーBBQ	複数の家族が自主的に集いBBQを楽しむグループ活動
焚火クラブ	父親たちが子どもたちを連れ焚火を囲みながら集うグループ
豆フェス	OBの実家の丹波篠山市内の畑で丹波黒豆の苗植え（6月）と収穫（10月）を行う家族が集う自然体験型プログラム
夏フェス	家族で集い、自然の中で流しそうめん（竹の切り出しから設置までを自分たちで行う）や水遊びをする体験型プログラム
地域飲食店とのコラボイベント	地域の飲食店とパパトークとのコラボレーションによる家族が集う食イベント
OB懇親会	不定期に開催されるパパトークの期をまたいだOBたちによる交流の集い



ラッシュアップとスタッフであるサポーターの継続的養成をあげることができる。参加者の主体性を担保し、参加者とサポーターが共にプログラムを育てていくという共通意識であるプラットフォーム（Platform）を基に、柔軟性をもったプログラムの改良を継続的に行っていくことが参加者のニーズに常に寄り添ったプログラムとして成長・発展を遂げていくために極めて重要な要素である。また、父親による父親のためのプログラムの創出とその持続可能な発展のために、パパトークの運営に携わるサポーターの継続的な養成が今後の課題である。参加者であった者がそこに留まるのではなく、次は他の参加者とプログラムをサポートするために自らのストレングスを活用していく、そのようなスパイラルアップを継続的に図っていくことも取り組むべき重要課題であろう。これらの課題も踏まえながら以下に一つの提言を行いつつ、本稿を閉じたいと思う。

提言：「父親の主体性を担保し、多様性を認め合

う緩やかなつながりを重要視した子育て支援プログラムは、父親の育児への関心を高め、父親が自らの子育てや自らを一人の存在として見つめなおす機会を提供する有効な場であり、父親を対象とした子育て支援プログラムの一部として積極的にその導入、拡大が検討、実施されるべきであろう。」

近年、日本各地において父親支援、父親を対象とした子育て支援プログラムが普及しつつある。その一方で、果たしてどれほどのプログラムがそこに参加する父親の主体性を担保することに主眼を置くことができているだろうか。それぞれのプログラムに独自性、多様性があることは無論大切なことではあるが、プログラムを提供する側にいる者たちがいったいどれほど参加者である父親たちの顕在的、また潜在的ニーズを把握し、それに寄り添い、自分たちの“正しさ”“良いはず”を無意識レベルでも押し付けてしまうことなく、父親による父親のための…といった真に父親を主体者としたプログラムの創生に取り組むことができているだろうか。これは父親

を対象とした子育て支援プログラムを実施していく上で非常に重要な問いかけではないだろうか。“良き父親”になってほしいと願うあまり、もし、父親たちに現代社会が創り出した“虚像”や支援者自らの欲求を投影してしまっていたとするならばそれはいかなるものであろうか。自戒の念を込めて支援を行う者はこれらの問いに真摯に向き合う必要があるだろう。

玄田⁷⁾は、社会学の立場から絆=Tie（結びつき）には、「強い絆」（strong ties）と「弱い絆」（weak ties）があるとし、強い絆は、家族や恋人、親友などとの絆を表し、これは「安心の源」となると述べている。一方、「弱い絆」は、たまに合う人などとの緩やかな絆であるとし、自分と異なる世界で生きている人や異なる情報、価値観を持っている人。そういう人と接することによって「あ、そうなのか」「へえ、そういう風に考えてみたことはなかった」などの新たな気づきが得られ、そこから「自分もやってみよう！」との思いが芽生える。つまりそれが「希望の源」となると述べている。パパトークのこれまでの道のりをふりかえるとき、大切にされてきたものはここでいわれている緩やかな絆、つまり「希望の源」であったと思わされる。スタートして10年を迎えたパパトーク。次の10年の歩みにおいても父親とその家族の「希望の源」となっていくことを願ってやまない。

参考文献

- 伊藤嘉余子編 2018 子どもと社会の未来を拓く相談援助 青踏社
- 玄田有史 2017 社会に「希望」が生まれるとき。(特集 つながる社会へ) 潮 第705 pp.66-71 潮出版社
- 厚生労働省 育MEN プロジェクト
<https://ikumen-project.mhlw.go.jp/project/about/>
 2020年2月15日閲覧
- 特定非営利活動法人親と子のふれあい研究会
<http://www13.plala.or.jp/fureai-k/index.html>
 2020年2月17日閲覧
- 西宮市 父子手帳「Hello Baby!! みやっこの育て方 ～お父さんになるあなたへ～」
<https://www.nishi.or.jp/kosodate/ninshin/ninshingawakattara/hajimeni/fushitetyo.html>
 2020年2月1日閲覧
- 芝野松次郎 2003 社会福祉実践モデル開発の理論と実際—プロセティック・アプローチに基づく実践モデルのデザイン・アンド・ディベロップメント 有斐閣

渡辺顕一郎 橋本真紀編 2012 詳解 地域子育て支援拠点ガイドラインの手引き 子ども家庭福祉の制度・実践をふまえて 中央法規

7) 「社会に『希望』が生まれるとき。(特集 つながる社会へ)」2017 潮 第705 pp.66-71 潮出版社